

第4研究：伝統産業における事業・家族・制度・技術の継承に関する日・中・韓比較 「産地形成におけるデザイン・技法の多様性と同業者間での協働の役割：波佐見焼の継承事例から」

池田梨恵子（第4研究、同志社大学 働き方と科学技術研究センター）

【第4研究の概要】

第4研究は、「伝統産業における事業・家族・制度・技術の継承に関する日・中・韓比較」をテーマとし、第21期より継続して研究を進めている共同研究プロジェクトである。本研究は、社会学、経営学、文化人類学、宗教学などの研究者が参加する学際的研究であり、伝統産業や地域企業における承継現象を「継ぐ」と「繋ぐ」という視点から多角的に検討している。事業承継は単なる経営上の問題ではなく、家族制度や宗教、ジェンダー規範など社会的・文化的要因とも深く関わる現象であり、また技術継承のあり方も産業ごとに異なる構造を持つ。本研究では、日本、中国、韓国を中心とする東アジア諸国を対象に、これらの要素を総合的に捉える比較研究を行っている。

第21期には、酒造業（広島・茨城）、出版・印刷集積（東京）、地域企業の事業承継（北海道）、窯業集積（京都・佐賀県波佐見）、さらに韓国や台湾を含む国際比較研究など、多様な事例調査を実施してきた。また、2025年6月には中央大学で開催された第5回 Global Business Anthropology Summit（GBAS）において、日本語セッション「東アジア企業における事業承継に関する学際的研究—承継プロセスと価値創造に焦点を当てて—」を企画し、第21期の研究成果を報告した。

【波佐見焼における事例研究】

本報告では、そのセッションの中で筆者が発表した波佐見焼の事例研究を紹介した。本研究は、2023年3月に長崎県東彼杵郡波佐見町で実施したフィールドワークに基づくものであり、窯元2社および波佐見焼振興会へのインタビュー調査を行った。波佐見焼は「日常生活の器」として発展してきた産地であり、安価であることや窯元ごとに異なるデザインや形状を持つ多様性が特徴である。伝統的な和柄だけでなく北欧風のデザインなど現代的なスタイルも取り入れられており、特定の技法に縛られない柔軟なものづくりが行われている。また、生産工程では型づくり、成形、焼成、流通といった分業体制が確立されており、大量生産を可能にしている。

本研究では波佐見焼きの多様性の背景を、制度的要因と産地の社会関係という二つの要因から検討する。第一に、2000年代以降の産地表示の厳格化により、それまで有田焼として流通していた製品を「波佐見焼」としてブランド化する必要が生じたことがあげられる。産地としての知名度が低かったことが逆に伝統的な様式への制約を弱め、モダンなデザインを積極的に取り入れる柔軟なものづくりを可能にした。第二に、窯元同士の関係性である。波佐見では窯元間に競争関係が存在する一方で、技術や情報の共有、仕事の融通など協力的

な関係も形成されている。

このように波佐見では、窯元同士が競争関係の中で独自のデザインや技法を生み出し多様性を形成する一方で、技術や情報の共有、仕事の融通などの協力関係も維持されている。このような競争と協力の関係は、産地の多様なものづくりを生み出すと同時に、産業を支えるネットワークを形成し、産地全体の継続を可能にする重要な要因となっている。

【課題と今後の研究】

一方で、課題として、生地を成形する「生地屋」の減少が挙げられる。家内工業的な経営形態や労働条件の問題から後継者が不足し、生産拡大のボトルネックとなっている。また、窯元の中には将来的に別分野への事業転換を視野に入れる例もあり、産地の継続は必ずしも自明ではない。今後は、個別企業の事業承継だけでなく、地域全体としての産業継承の構造に注目し、とくに生地屋への調査を進めるとともに、地域ネットワークや人材育成の仕組みを分析する予定である。